

## 茜色の歌姫



## 第五部 法隆寺炎上



法隆寺（奈良県斑鳩町）

是の冬に、（中略）斑鳩寺に災けり。（中略）一屋も余ること無し。大雨ふり雷震る。

（『日本書紀』卷第二十八）

天皇、臥病したまひて、痛みたまふこと甚し。ここに、蘇我臣安麻呂を遣して、東宮を召して大殿に引き入る。（中略）天皇、東宮に勅して鴻業を授く。乃辞讓びて曰はく、「（中略）願

はくは、陛下、天下を挙げて皇后に附せたまへ。仍、大友皇子を立てて、儲君としたまへ。臣は、今日出家して、陛下の為に、功德を修はむ」とまうしたまふ。天皇、聴したまふ。即日に出家して法服をきたまふ。(中略) 或の日は、はく、「虎に翼を着けて放てり」といふ。

〔『日本書紀』卷第二十八〕

### 第三章 斑鳩の炎 669～670

秋。九月も終わろうとする頃、飛鳥の大海人皇子のもとを、天皇よりの使いが訪なつた。

「十月十五日、天皇ならびに皇后は、斑鳩寺に御幸したまう」

留守司として、然るべく諸事、調えるべし、とのことであつた。

使者が去つた後、皇子は舍人どもを集めた。

「警護には、蘇我果安と巨勢比等が当たる。三日の後、二千の兵を随れて、斑鳩に至る」

二千の兵……。舍人どもは固唾を呑んだ。斑鳩は飛鳥より北へ四十里(約20キロメートル)。指呼の間に二千の兵。しかも、率いるは、大友皇子の側近。さかんに大海人皇子を排すべしと大友皇子に説いている輩ども。

「三日では……」

朴本大國が呟いた。

「兵を調えることもかなわぬ……」

伊勢や尾濃では、大海人皇子に同心する海部、小子部、多らの豪族が、ひそかに兵を集め、鍛えつつある。しかし今から彼等と呼んでも、とうてい間に合わない。

「故に、今は随う」

皇子は言った。

「天皇が、ここで軍を興すことを望みたまうとは思えぬ。未だ民に厚く崇められる厨戸皇子が建立したもうた斑鳩寺に御幸することにより、不満を抱く民どもを宥めようとの意である。しかし、事には備えねばならぬ」

皇子は、村国男依に眼差しを向けた。

「男依よ、汝は疾う伊勢へ發て。海部石床に命じ、兵を集めさせよ。もし、吾に何かあらば……」  
舎人どもは皆、瞬きもせず、皇子を見詰めた。

「その時は、軍を興し、近江へ攻め入れ」

その夜。

近江京の蘇我安麻呂の邸の門がそつと開かれ、伴部がひとり、静かに大路へと出た。懐に抱えた何かを、双の腕で抱くようにして、小走りに闇夜を駆け始めた。

その背後を、音もなく二人の女が尾いてくるのも、伴部は気づかなかつた。不意に用を命ぜられ、わけもわからぬまま、ただ一散、行くべきところへと急いだ。

伴部は、大路を突つ切り、やがて、都のはずれにひっそりと建つ家の前に立った。その家に住むのが、大海人皇子が派した舎人の置始比等とその子の宇佐伎であることを、伴部は知らない。

周りを見回し、ゆっくりとその戸に歩み寄ろうとした時、その背後に女が忍び寄り、腕で首を絞めた。振り向こうとしたとき、もう一人の女が、伴部の正面に駆け寄つた。

伴部が呻いた。その股間に、正面に立った女の手が食い込んでいた。背後から首を絞めた女が、悲鳴を發しようとするその口を塞いだ。伴部は苦悶に貌を歪めてのけぞり、やがて動かなくなつた。

ゆっくりと伴部の軀が地に崩おれた。女の一人が、その喉を踵で踏みつけた。ふたつの影は、伴部の軀を運んで歩み去つた。

近江京から二里（約1キロメートル）はなれた小高い丘を、蘇我安麻呂の伴部を運んできた二人の女が、樹々を分けて登っていた。やがて、小さな窪地に至り、肩で息をしつつ、伴部の軀をおろした。窪地にはすでに、石の鋤がふたつ、置かれていた。二人は、鋤を手にとり、穴を堀り始めた。

一人の女が貌を上げた。黒雲が、月影を覆おうとしていた。

「疾う」

月明かりが雲に閉ざされる前に、事をすませようと、一人の女が、もう一人を急かした。

「吾が教えたとおりのよ」

不意に声がした。二人の女は鋤を投げ出し、腰の短剣を抜いて身構えた。

「然り、不意の事には、まず、身を守れ。それも吾が教えたとおりのよ」

「誰ぞ！」

一人が叫んだ。

「叫ぶな」

落ち葉を踏みしめ、樹々の茂みのなかから、女が現れた。雲に覆われようとする月の明かりが、女の貌を照らした。

「か……」  
二人の女は、眼を見開いた。  
「がみの……」

雲が月を覆い、丘は闇に包まれた。何も見えぬなか、二人の女がゆつくりと倒れた。

再び月が雲間に現れ、地上を照らした。  
喉を掻き切られ、絶命した二人の女の屍の狭間に、血が滴となって垂れ落ちる短剣を逆手に持ち、膝をついて荒く肩で息する讚良皇女の姿が浮かび上がった。

「し得たり」

鏡郎女が、呟くように言った。

「二人の土蜘蛛を相手に、見事であった」

讚良皇女は黙したままであった。鏡郎女は、静かに続けた。

「剣で人を殺めるのは、初めてであったな」

尾の国で出会ってから一年が経とうとしていた。讚良皇女は、鏡郎女とともに諸処を旅し、土蜘蛛の技を仕込まれた。厳しい修業に耐え、やがて近江に近い山中に棲み、時折、近江京に出て、豪族どもの蔵に忍び入り、珍宝を奪っては棄てることを繰り返した。七枝の剣は、鏡郎女と二人で盗んだ。やがて皇女は、独りで蔵に忍び入るまでに至った。

天皇が斑鳩に御幸すると知った鏡郎女は、「汝に教える最後の技」とて、短剣の使い方や仕込んだ。その仕上げに、近江京内で怪事の探索にあたる土蜘蛛二人を殺すよう、命じた。土蜘蛛ど

もが、大海人皇子と通じる蘇我安麻呂の邸を見張り、使に派された伴部を殺したことは偶然であった。

鏡郎女は、並んで倒れた二人の土蜘蛛の屍に歩み寄り、膝を突いて傷を調べた。喉が真一文字に割れていた。

「あえて言えば……」

郎女は言った。

「一人は生かしておき、安見娘に何を命じられたか、責め吐かせる手もあった。されど、いまの汝にそこまでは望むまい」

讚良皇女は、唇を噛みしめ、ひたすら息を整えていた。鏡郎女は、一人の屍の貌をのぞきこみ、呟いた。

「これは……伊根。播磨の生まれ。大水で親もきょうだいも失った乙女」

頬は血にまみれ、眼を見開き、半ば唇を開いたまま、しかし面差しは穏やかだった。鏡郎女は、もうひとつの屍に眼差しを移した。

「香奈手……。淡島の生まれ。親に棄てられし子。辛さも悲しさも見せず、明るく振舞っていた」

「何が言いたい！」

讚良は叫んだ。

「この二人を殺せと言ったのは、汝ぞ。汝が育んだ土蜘蛛を殺せと言ったのは、汝ぞ！」

「汝はいずれ、この国を統べるべき身……」

鏡郎女は静かに応えた。

「恨み辛み、痛みを背負うて生まれた子の多さ、汝ならば分かるはず」  
立ち上がり、二人の土蜘蛛が埋めようとした蘇我安麻呂の伴部の軀に歩み寄り、鏡郎女は続けた。

「すでに息絶えている」

凝つと見詰める讚良皇女に、鏡郎女は静かな眼差しで応えた。

「策を動せば、これだけ人が故なくして死ぬ。されど、策なくば、国は統べられぬ。覚えておけ」  
鏡郎女は、手のない右の腕を伴部の懐に差し入れ、衣の裡を探り、収めてあった木簡を口に啜えて取り出した。

「これが目当てか……」

読め、というふうには鏡郎女は、讚良皇女の足下に、木簡を置いた。皇女は拾い上げ、読んだ。

「天皇の斑鳩寺への御幸に……安見娘が随行する」

「安見娘がの……」

鏡郎女は不敵に微笑んだ。讚良皇女は不安げに言った。

「ただの警護ではあるまい。もしや……」

「大海人皇子を害そうとの策ではあるまい」

鏡郎女は、微笑みを消さず、漆黒の雲の波間を漂う銀色の月を見上げた。

「安見娘は、気づいている。近江を騒がせる怪事が、誰の手によるものか、何を企んでの所業かを」

しばし月を見つめ、やがて笑みをおさめて面差しを引き締め、鏡郎女は讚良皇女を見やった。

「その木簡、置始比等が家へ投げ入れよ。屍は、ここに埋めよう」

鏡郎女の眼は、二人の土蜘蛛が用いていた石鋤に注がれていた。讚良皇女は、鏡郎女の手のない両腕を見やり、腰を屈めて石鋤を取り、屍となった二人が掘っていた穴に突き入れた。眼を閉じ、新羅の言葉で鎮魂の呪を唱えていた鏡郎女は、三つの屍を土中に埋め終えた讚良が、息を切らして汗を拭っているのを睨上げて確かめ、言った。

「吾等もゆくぞ」

「斑鳩へ？」

「然り」

七十年ほど昔、厨戸皇子は、飛鳥より離れた地に宮を築き、広く人材を集め、隋から伝わってきた仏典や法令、書を学ばせた。その斑鳩宮の傍らに、二町（約200メートル）四方の寺が築かれた。



救世観音像（法隆寺）

五重塔や金堂が並ぶ境内の片隅に、八角形の御堂が建てられていた。人が十人も入るのがやつとの狭さ、高さは三尺（約3メートル）。百済よりもたらされた救世観音が安置されている他は、何もない。

かつて、厨戸皇子は、難事があれば、この八角堂に籠もり、救世観音の前に額ずき、様

々に想を練ったと伝えられていた。

厨戸皇子の長子、山背皇子が蘇我鞍作によって討たれ、一族が悉く斑鳩寺で自死した後、訪なう者も少なく、寺のあちこちは毀（こぼ）れ、草が生えるに任せてあった。

不意の天皇の御幸に、にわかに斑鳩寺は活気づいた。毀たれた金堂や五重塔を修復する技人が遣わされ、近くの里から民が徴され、天皇と皇后を迎えるにふさわしく、装いが施された。天皇が、厨戸皇子の聖徳にあやかるうと、近江より御幸される……。

沸きたった民の歓びは、やがて近江より二千の兵を随れて現れた蘇我果安や巨勢比等によって、苦役へと変わった。

疾うせよ、間に合わぬ……。

果安らは、馬上から鞭を振るって、徴された民どもを急がせた。夜を徹して興事は続けられた。日が落ちれば、酒がふるまわれるのが慣わしであったが、果安は、夜もあかあかと松明をともし、民を働かせた。手が足りぬと遠方の里の民を呼び寄せ、遅ければ、容赦なく鞭が振られた。

かつて、狂心の渠に狩り出された折は、かようではなかった。あの頃は、働いたぶん、愉しみがあつた……。

興事に立ち会った大海人皇子の舎人どもは、河辺宮に走り、口々に民の怨嗟を伝えた。皇子はただ、頷くのみであった。

積み重なる民の恨みが、いずれ、吾を助ける……。

果安らには逆らうな、ただ、折を見て、民を労らい、慰めよ。

皇子はただ、そのみを舎人どもに命じた。

十月十五日。

斑鳩寺の四方は回廊で囲まれ、中門をくぐると、五重塔が聳え立っていた。五重塔は、その礎に仏舍利、すなわち釈迦の遺骨を置く。むろん、すでに千数百年の昔に入滅した釈迦の遺骨が残っていないはずもない。釈迦入滅の地として伝えられる娑羅の地の土が、唐、百済を経て運ばれ、仏舍利として埋められた。

五重塔に拝礼した後、天皇、倭媛皇后、大友皇子、大海人皇子、さらに蘇我、中臣、巨勢、紀ら高官が列をなして金堂へと向かった。金堂に安置された釈迦三尊の像の前に居並び、僧侶たちの誦経が響く中、みな、眼を閉じ、両手を胸の前で合わせる。中央に鎮座する釈迦の両脇に、薬王・上の両菩薩。厨戸皇子に仕えた隋よりの渡来人、鞍作止利が鑄造したと伝えられる。ひさびさに鏤を落とした三尊の像。その傍らに、一幅の絵が掲げられていた。冠をつけた厨戸皇子の左右に、童形の皇子が二人、弟の殖栗皇子と、長子の山背皇子が立っている。

厨戸皇子は、大和を開いた飯豊大王の裔。その子の山背皇子は、大和の大王位を継ぐべき御方だったが、吉備より流れ来たり、大王位を篡奪した田村皇子の妻、すなわち宝大王と結んだ蘇我鞍作によって滅ぼされた。

年老いた豪族どもは、そう囁きあつた。

天皇は、百済人なれど、皇后は、飯豊大王の血を引く御方。さらに、大海人皇子は、田村皇子の御子。

すなわち、厨戸皇子が建立された寺で、厨戸皇子の絵図の前に拝礼するは、今後の日本と名を改めた大和を統べるは、田村皇子の裔ではない、との意であろうよ。

されば、病がちなる天皇は、大海人皇子にだけは、高御座には即かせまい、との意か。さもあらん。

されど、大海人皇子は、この度の斑鳩寺への御幸に、よくぞ加わられたものかな。もはや、近江には抗しがたしと悟られたか。

そんな風評をよそに、天皇の背後、大友皇子と並んで合掌する大海人皇子の心中は別にあつた。

数日前。

近江にある置始比等から書が届いた。

……この度の斑鳩への御幸、安見娘が警護に混じっている。

書を近江から運んできた比等の子、宇佐伎はこう言い添えた。

確かに、蘇我安麻呂の字。されど、安麻呂の伴部が届けたものにあらず。払暁、家の裡に放り込まれていた。密かに安麻呂の助力を得て探らせたところ、書を託した供部の屍が、近江京に程近き丘に埋められていた。伴部のみならず、二人の女の屍もあつた。女の屍は喉を掻き切られ、伴部の屍はふぐりを砕かれていた。

報せを聞き、大海人皇子は舍人どもを退らせ、独り思索した。

蘇我安麻呂の伴部のふぐりを砕いて殺したのは、二人の女——すなわち、安見娘が束ねる土蜘蛛であろう。その土蜘蛛が、伴部から奪った木簡を、置始比等の家に放り込んだ。土蜘蛛を殺し、

木簡を奪ったのは誰か……。

二人の土蜘蛛は、掻き切られた喉の他、傷の痕はなかったという。この鮮やかな技が、やはり土蜘蛛のものであるとすれば……。

額田郎女が？ 否。

天皇が、未だ百済の豊璋王子であつた頃、筑紫より軍を率いて近江に至つたとき、大海人皇子もまた、大伴ら中小の豪族とともに、瀬田川に軍を進めた。豊璋王子の陣より軍使として瀬田川に舟を漕ぎ出た額田郎女は、大海人皇子に言った。

「皇子は……何もしない」「吾は戦うてきた、皇子のために。皇子は、吾のために、戦うたことがあるか！」と。

あるいは、大海人皇子への助力ではなく、安見娘への報復とみれば……。

鏡郎女か？ 安見娘に討たれ川に落ちたという鏡郎女の屍はついに見つからなかった。もし、生きているとしたら……。しかし、鏡郎女が何故に吾に助力を……。

それより先は、案しても何も浮かばない。

ただ、斑鳩寺で何かが起こる。それだけは、察せられた。

僧侶の誑経が止み、天皇が立ち上がった。居並ぶ皇后をはじめ背後の百官もまた、衣擦れの音を立てて立ち上がった。

天皇が踵を返す。背後に居並んだ人々が左右に別れ、道を作る。その道を、天皇はしずしずと歩んだ。その後を皇后が、さらにその後を大海人皇子と大友皇子とが並んで随つた。金堂を出て、

階梯を下り、玉砂利の敷き詰められた庭に降りる。

天皇は、皇后を伴い、金堂近くに立てられた八角の御堂に入った。二人、救世観音の前にひれ伏し、今はなき厨戸皇子の御霊を鎮魂し、政事のことどもを問う。

八角の御堂の扉前の庭に、大海人皇子と大友皇子、さらに群臣は腰を下ろした。御堂の裡にある天皇と皇后の瞑想を妨げぬため、皆、黙っていた。

大海人皇子は、時折、眼を上げ、周りを窺った。群臣からやや離れて、長剣を提げた舎人どもが、御堂を囲むように立っている。二千の兵は、隙間なく寺を囲んで回廊の外。

この場で事を起こすとすれば、いづくに潜むか……。五重塔、金堂、講堂。いずれも、天皇が着く前に厳しく調べられたはず。しかし、土蜘蛛の技を以てすれば、舎人どもの眼に咎められることもなく、寺内に身を潜めることなど、難しいことではない。

そして、それを知る安見娘は……。

皇子はひたすら待った。事が起こるのを待った。事が起こっても、狼狽えることだけはすまいと心に決めながら。

不意に、群臣の鼻孔が動いた。焦げた匂い。

「火ぞ！」

誰かが叫んだ。群臣は一斉に立ち上がった。金堂の、八角の御堂に面した壁に穿たれた窓から黒煙が濛々と噴き出し、やがて炎が渦を巻いて御堂に襲いかかろうとしていた。

「舎人の方々よ！」

蘇我果安が叫んだ。

「疾う、天皇を！」

三人の舎人どもが御堂の扉にとりつき、押し開け、飛び込んだ。そのなかに、大海人皇子は、知った貌を見た。

あれは……。

皇子は、自らも御堂に駆け入ろうとして、群臣や舎人どもに遮られた。舎人どもは口々に叫んだ。

「皇子の方々、大官の方々、疾う、寺の外へ出でたまえ！」

「如何した」

身を起こして問う天皇に、舎人どもは膝を突き、金堂に火つけり、と叫んだ。

「火が？」

天皇は眉根を蹙め、瞬きしつゝ急ぎ思案を巡らした。倭媛皇后は袖で口を覆い、開けられた御堂の扉の隙間から、黒煙たちこめる境内を見つめていた。

「まずは、皇后を外へ」

天皇の声に、二人の舎人が皇后を両脇で抱え、外へ随れ出した。

後に続こうとした天皇の背に、声が投げつけられた。

「豊璋ー！」

総身が強張った。その声は……。

振り向くと、残った一人の舎人が、左右の袖を差し出していた。袖から覗くその腕には、手が



なかった。

舎人は、笑った。否、舎人ではなかった。

「汝は……」

問うより早く、天皇は股間に重い衝撃を受けた。激痛が総身を貫き、視界が暗く閉ざされ、身を支えていた双の膝は力を失い、五臓がせり上がり、口から飛び出しそうであった。

「麗……」

天皇は呻き、くずおれた。

「姫」

「方々！ 来られよ！」

皇后を連れ出した舎人どもは、御堂から発せられた声に振り向いた。一人、御堂に残った舎人が叫んでいた。

「天皇が！」

数人の舎人が御堂に駆け込んだ。救世観音像に寄り掛かるように、天皇が倒れていた。白眼を剥き、総身をわななかせ、双の手は、血塗れの股間にあてがわれていた。

舎人どもは天皇に取り付き、ゆすぶった。天皇は毫も動かなかった。舎人どもは喚きながら、天皇を抱え上げた。

斑鳩寺の庭は、黒煙と叫喚に満ちた。臣も僧も、押し合い揉み合いつつ、中門に向かって駆

けた。炎は、金堂と八角の御堂を飲み込み、さらに強風に煽られ、講堂にも迫っていた。

人々と共に中門に向かっていった大海人皇子は、眼前で転んだ誰かに脚をとられ、自らも玉砂利に手を突いた。やっと起き上がりざまに振り向いた皇子は、眼を見開いて、立ちすくんだ。

あれは……。

講堂から次々と僧どもが逃げだし、大雨の後の川の流れるように、中門を目指していた。

一人の舎人が、蝶の舞うように巧みに僧どもを避けつつ、流れに逆らい、講堂へと向かって駆けていた。

間違いない……。

皇子は心の裡で呟いた。

鏡郎女……。

すでに、広い講堂に人影はなかった。

「ようぞ、し得たり」

鏡郎女は叫んだ。

「応！」

天上の梁から、同じく舎人の装いをした讚良皇女が飛び降りた。

皇女と鏡郎女は、数日前から講堂の梁の上に、庫裡の床下に、巧みに所を変えて潜んだ。そしてこの日、天皇が八角の御堂に入るのを見すまし、讚良皇女は金堂に火を放った。鏡郎女は天皇と皇后を救うべく御堂に入った舎人に混じり、みごと、天皇のふぐりを蹴り碎いたのだ。

「みごと砕いたぞ」

鏡郎女は上気し、息を弾ませていた。

「みごと……あの百済人のふぐりを……二つながら……」

「郎女よ、吾等も疾う、行こう」

讚良皇女は鏡郎女の肩を掴んで促した。

「風が強い。やがて講堂にも火が回る」

「汝は先に行け」

鏡郎女は、すでに息を整え、静かな声音で言った。

「吾は未だ、せねばならぬことがある」

「聞いておらぬ！」

讚良皇女は抗った。

「すでに、汝が敵は討った。他に何をすることやある」

「問うな、ただ行け」

鏡郎女は、冷たい眼差しを放った。動かぬ瞳に、讚良皇女は後ずさった。鏡郎女は静かに続けた。

「河辺宮に行け。ふぐりを砕かれた天皇は、すでに廃れ人、やがて大友皇子が近江を差配する。必ず、軍となろうぞ。汝は、大海人皇子を助けよ。土蜘蛛の技が、役に立つこともあろう」

讚良皇女は俯いて唇を噛みしめていたが、やがて呟くように問うた。

「汝は……安見娘を？」

鏡郎女は、かすかに睫を動かしただけであった。皇女は重ねて問うた。

「安見娘は、汝を追ってここに来る……それを待つと？」

「行け」

鏡郎女は言った。

「これは……汝とは関わりのないこと。これよりは、土蜘蛛ではなく、皇女として、大海人皇子を輔けよ」

「諾」

皇女は濡れた瞳を鏡郎女に向け、声を震わせた。

「郎女も必ず、河辺宮へ……」

郎女は頷き、顎を動かした。讚良皇女は去った。

噂せるような黒煙が、講堂の裡にも押し入ってきた。鏡郎女は、瞼を閉じ、身じろぎもせず、立ちつくしていた。

安見娘は、すでに近くにいます。

眼を刺し、鼻孔を刺す黒煙が講堂に満ち、鏡郎女の五感が鈍るのを待っているはず。

鏡郎女は耐えた。煙を吸わぬよう、息は止めていた。血が冷え、肺腑は縮み、心臓は激しく脈打った。

煙とともに肌を焼く熱気が迫っていた。その熱を通して、かすかな空気の揺らぎが、ゆつくりと気配を消して忍び寄ってくる安見娘を、感じさせた。

来た……。

鋼の匂いが、かすかに鼻孔を突いた。

鏡郎女は踵を返した。

振り向いた郎女の眼に、剣を振り上げた安見娘の貌が飛び込んできた。その貌から悲鳴が迸った。鏡郎女の唇から、二本の針が放たれ、閉じられた安見娘の左右の脛から血が噴き出した。双の手で貌を覆って安見娘は倒れた。

止めを……。喉を砕くべく、足を踏み出そうとして、鏡郎女はよろめいた。左の肩から鎖骨にかけ、焼けるように痛みが走った。安見娘は眼を潰されて倒れつつ、鏡郎女の肩先を斬り下げていた。

激痛に思わず息を吐いた。その口から黒煙が飛び込み、喉を圧した。郎女は、血を噴く左肩を手のない腕で押さえ、床に膝を突いて噎せた。安見娘は、やや離れて倒れ臥したまま悶えている。「郎女！」

その声に貌を上げると、讚良皇女が駆けてきた。

来るな……。叫ぼうとして声は出ず、鏡郎女はうずくまった。

皇女は、衣の袖を裂いて郎女の傷を覆い、右脇に己の肩を差し入れ、支えて立たせようとした。

「皇女……」

鏡郎女は声を振り絞った。

「後を……」

振り向くと、いつの間にか安見娘が立っていた。左右の眼を潰されながら、なおも剣を構えて迫ってきた。鏡郎女は、倒れ込むように皇女から身を離れた。振り下ろされた剣を辛うじてかわ

し、かわしつづつ剣を抜き、讚良皇女は安見娘に軀を打ち当てる。切っ先が、深々と、安見娘の腹部を貫いた。安見娘は仰向けに倒れた。

讚良皇女は、その腹部にまたがり、血に濡れた剣を安見娘の喉に擬した。

「ふ……ひと……」

安見娘の唇から、悲痛な呻きが漏れた。皇女は、思わず手を止めた。

「ふひと？」

安見娘の右の拳が、皇女の胸乳に叩きつけられた。激しい痛みにも皇女は身を振り、仰向けに倒れた。その手からこぼれた剣の束を、立ち上がった安見娘の手が握んだ。

やっと眼を開けた皇女の前に、双の眼と腹から血を迸らせつつ、安見娘が剣を振り上げ、獣のように咆哮していた。

讚良皇女は動けなかった。恐怖が、彼女の総身を凍り付かせていた。思わず、脛を閉じて叫んだ。

「草壁……」

いつしか、安見娘の咆哮が止んだ。

眼を開けると、安見娘は、床に俯せに倒れていた。右手で己が腹部を、左手で股間を押さえ、細かく総身をわななかせている。

その傍らに、鏡郎女が立っていた。安見娘が剣を振り下ろそうとした刹那、背後からその陰を蹴ったのだった。

「皇女！」

鏡郎女が苦しげに叫んだ。

「止めを」

讚良皇女は、弾かれたように起きあがり、床に落ちた剣を掴み、苦しみ悶える安見娘の脇腹を蹴って仰向けにし、左の胸乳の下から心臓へと、深々と突き刺した。

安見娘は一瞬のけぞり、やがて絶命した。

「行くぞ！」

返り血を浴び、惚けたように膝を突いていた皇女を促し、鏡郎女は、身を翻して駆けだした。

舎人の衣を脱ぎ捨てて火中に投じ、右往左往する大官や舎人、兵どもの群を掻き分け、近くの川に用意した小舟に飛び乗り、漕ぎに漕ぎ、すぐに向こう岸に飛び降り、さらに駆けつけた。

辿り着いたのは、古い塚であった。幾百年昔に築かれたか、草木の生えるに任せ、遺骸を収めていたはずの横穴は、石棺の他は何もない。

讚良皇女は、横穴の床に鏡郎女を寝かせた。竹筒の水で傷を洗い清めた。

「疾う、行け！」

苦痛に喘ぎつつ、鏡郎女は呻いた。

「吾をおいて、疾う行け」

「行けるものか」

讚良皇女は、針に糸を通しながら言った。壁を小石で覆った狭い横穴に、声が木霊した。鏡郎

女は言った。

「吾は、罪を重ねた。このまま、苦しみつつ死のうと、それも因果」

「今は死なせぬ」

鏡郎女の口に、舌を噛まぬよう板を咥えさせ、ざっくりと割れた皮膚に針を刺した。鏡郎女は苦痛に眼を閉じ、板を噛み締めた。

「汝は生きて、裁きを受ける。いづれ、大海人皇子が、国を統べる日に」

傷を縫い合わせ、葉草を塗り、布を巻いたとき、すでに鏡郎女は意識を失っていた。口から、唾えていた板が落ちた。

歯形が深く刻まれていた。

「何故に……」

やがて目覚めた鏡郎女は、讚良皇女に問うた。

「すぐに止めを刺さなかった」

「口をきくな」

讚良皇女は、濡れた布を郎女の額に当てつつ、言った。

「吾が、安見娘の陰を蹴らねば、汝は死んでいた」

しばし俯き、讚良皇女は呟いた。

「ふひと……安見娘はそう言ったな」

鏡郎女は黙して頷いた。皇女は問うた。

「何の意だ？」

「何の意と、汝は思うたぞ」

問い返され、讃良皇女は口を嚙んだ。鏡郎女は見詰め、やがて問うた。

「汝は、子を生んだか」

皇女は面持ちを引き締め、鏡郎女を見やり、しばし見詰め、やがて頷いた。

「さもあるう……」

鏡郎女は眼を閉じ、言った。

「それ故、汝は思うた。ふひと、とは、安見娘が子であろうと」

皇女は応えなかった。鏡郎女は続けた。

「ふひと、とは、安見娘が中臣鎌子との間になした男子。されど、土蜘蛛の掟では、男子はふぐりを潰されて奴とされ、女子は土蜘蛛として育まれる。安見娘はいずれをも拒んだ」

「拒んで……如何した」

気遣わしげに問う皇女に、郎女は微笑んだ。

「安見娘は、その子を中臣鎌子に託した。鎌子は、山背の田辺なる豪族に預けた。その子は、田辺に連なる車持の女を母として、無事、育まれている」

讃良皇女は肩を落として溜息をつき、問うた。

「汝が、それを赦したのか」

「赦しはせぬが、咎めもしなかった。慧い子になったと聞く。汝等がいずれ、国を統べる上で、役に立とう」

「役立てよ、というのか」

鏡郎女は応えなかった。応えず、眼を閉じた。やがて寢息が漏れた。

いつしか、壁にもたれたまま寝入っていた讃良皇女は、目覚めた。目覚めて、傍らに臥していたはずの鏡郎女の姿がないことに気づいた。

斑鳩寺の金堂に発した火は、金堂のみならず、講堂、五重塔、回廊、すべてを焼き払った。やがて雷が轟き、激しい大雨が、焼け跡を水に浸した。

天皇は、近くの法起寺に運ばれ、百済僧や医人の手当てを受け、やがて大官とともに近江に還った。

焼け跡からは、焼け焦げた屍がひとつ、見つかった。何者かも分からぬまでに焼けていたが、耳に着けてあった翡翠の環に、残って科人の追求に携わっていた中臣金が貌を曇らせた。

翡翠の耳環は、近江の中臣鎌子に届けられた。

「安見娘……」

鎌子は、耳環を見るなり、呻いた。

「安見娘よ……安見娘よ……」

そのまま倒れ臥した。

「斑鳩寺を焼き、父なる天皇を害し奉った科人が誰か、探るまでもなく決まっておろう」

大友皇子は、貌じゆうを不快げに歪めつつ、言った。

「すなわち大海人皇子の意を受けた者。何故、大海人皇子を咎めぬぞ」

「相違なければ……」

斑鳩から近江に戻った中臣金は、肩をすくめ、声をしわがらせつつ陳べた。

「確かな証かしかもなく、罪に問うわけにも……」

「疾う捕らえ、近江に随つて来、答で以て責め吐かせ、しかる後に罪に問えばよいではないか！」  
大友皇子はわめいた。

「されど……」

蘇我果安が口を挟んだ。

「倭媛皇后は、確かな証かしなしに、皇子を責めるなかれ、と」

大友皇子は齒噛みした。日本には、いまだ唐のような万民に課せられるべき律令はない。民はそれぞれの邑の掟で裁かれ、皇子皇女や豪族の罪は、天皇の意に委ねられる。

病床に臥した天皇は、国事を倭媛皇后に称制させた。皇后の意には抗えない。

そもそも、何故に女が、国を統べる。唐にては例がない。百済も新羅も、唐に倣い、女王を戴く蛮風は絶たれている。

「金！」

拳で卓を叩いて、皇子は叫んだ。

「さらに人を派し、大海人皇子を糾問せよ。河辺宮を探らせ、必ず、確かな証かしを見出せ！」

大友皇子の邸を出た中臣金は、従兄である鎌子の邸に向かった。このごろは籠もりがちとはいえ、鎌子は中臣の長。こまごまと報せるべきことは多かった。

邸に着くと、鎌子は不在であった。

「いづくに」

と問うと、伴部は、

「安見娘が邸に」

と応えた。またも馬を歩ませ、安見娘の邸に向かった。茅を葺いた門をくぐると、女が一人、出迎えた。

土蜘蛛か……。来意を告げ、踵を返して歩き出した女の背を眺めつつ、金は思った。中庭に通されると、祭壇が設けられ、四人の女が額づいていた。祭壇には小さな壺が置かれている。斑鳩の地で茶毘に付された安見娘の骨が納められているのであろう。

「この女どもは……」

金は、案内した女に問うた。

「土蜘蛛か？」

女は頷いた。金はさらに問うた。

「これですべてか？」

女は俯き、応えなかった。安見娘という長を失い、多くが逃散したと聞いていたが、残ったのはわずか五人とは……。

もはや、土蜘蛛は滅びたと言っている。

去年の春、蒲生の野の御狩りの宴で、安見娘のふぐりを蹴られた恨みを、金は忘れていない。安見娘の死は、金には快事であった。

「鎌子はいずくに？」

金が問うと、女は、祭壇の後に建てられた庫を指した。金は庫に歩み寄り、扉に手をかけて開いた。

暗い庫の裡に、こちらに背を向けて、人がうずくまっていた。

「鎌子か？」

おそるおそる問うたが、応えはなかった。歩み寄り、膝を突いて覗き込むと、確かに鎌子であった。床に右頬をつけ、臉を閉じていた。その傍らに、翡翠の耳環が置かれていた。

「これは……安見娘の？」

金がその名を口にしたとき、鎌子は眼を開けた。瞳が揺れ、涙が溢れた。

「安見娘よ……」

噎れた声が絞り出された。総身を振るわせ、中臣鎌子は嗚咽した。

「安見娘よ……」

庫を出ると、さきほどの女が待っていた。

「いつも、あのように？」

金が庫を指しつつ問うと、女は頷き、言った。

「あの耳環が届いてよりずっと……」

水しか口にせず、庫に籠もったままであるという。

「かくも、あの土蜘蛛を恋うていたとはな……」

安見娘の邸を辞し、馬に揺られつつ、金は溜息をついた。

もはや、鎌子は長くはない。天皇もまた、病床に臥せたまま、崩御したもう日も遠くはあ  
るまい。

鎌子が死ねば、中臣を統べるは吾。やがて大友皇子の下、国を動かす日も近い。金は、頬を緩  
ませた。

それからほどなく、内大臣中臣鎌子は五十五歳で薨じた。

年が明け、官位が改められた。大友皇子は太政大臣に、蘇我赤兄が左大臣に、中臣金  
が右大臣に、蘇我果安、巨勢比等、紀大人が御史大夫として、引き続き天皇に代わって称制する  
倭媛皇后を輔弼するものとされた。

大海人皇子は飛鳥留守司にとどめられ、河辺宮の周りは、弾正台の官人が徘徊した。宮の裡は、  
静まりかえっていた。